

自閉スペクトラム症者へのストレングス視点による生活支援

松 山 郁 夫

Support of Life by the Strength Perspective for Persons with Autism Spectrum Disorder

Ikuo MATSUYAMA

要 旨

自閉症児者の生活の質を高めていくためには、ストレングス視点による支援が有効と考えられる。本研究の目的は、生活支援員のストレングス視点が、障害者支援施設における自閉症児者の生活への支援に対して、どのような影響を及ぼしているのかを検討することとした。生活支援員を対象として自閉症児者のお茶の時間への支援に対して意識する度合いを問う、独自の質問を記載した質問紙票による調査を実施した。得られた424名の生活支援員からの有効回答をストレングス視点の強さにより2群に分け、両群間で、各質問項目について比較検討をした。その結果、ストレングス視点は、お茶の時間において様々な配慮をしながら支援をすることに繋がること、自閉症児者の社会性を高め、その生活全般において生活の質の向上を目指すためには、人間関係の交流の中で、ストレングス視点を生かす必要があること等が考察された。

Key words : 自閉症、お茶の時間、生活支援員、障害者支援施設、ストレングス視点

I. はじめに

アメリカ精神医学会の「精神疾患の分類と診断の手引き第5版」(Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 5th edition: DSM-5)では、自閉スペクトラム症(以下、「自閉症」と記述する)について、「社会的コミュニケーションと社会的相互作用における持続的な欠損」と「行動、興味、活動の限局的かつ反復的なパターン」の障害特性を持つ神経発達障害としている(APA 2013)¹⁾。

自閉症は、社会的相互作用の障害、コミュニケーションの障害、想像力の障害の3領域の行動の特徴(「三つ組」とされている)からなる障害と定義されている。また、自閉症児者が周りとのコミュニケーションを作りにくいのは、時間と空間のなかに自分自身を位置づけることができないためと指摘されている(Wing 1996)²⁾。自閉症者のコミュニケーション能力に関する障害や社会的認知の障害は、対人関係の形成に困難をもたらし、そのことで不適応を生じる可能性が高い(小林 1999)³⁾。

平成24（2012）年6月に公布された「地域社会における共生の実現に向けて新たな障害保健福祉施策を講ずるための関係法律の整備に関する法律」（平成24年法律第51号）によって、障害者自立支援法は「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律」（障害者総合支援法）に改正された。目的規定については、「自立」から「基本的人権を享有する個人としての尊厳」に代わり、障害者総合支援法の目的の実現のために、障害福祉サービスによる支援に加えて、地域生活支援事業その他の必要な支援を総合的に行うようになった。

障害者支援施設については、障害者に対して夜間に「施設入所支援」、昼間に「生活介護」、「自立訓練」、または「就労移行支援」を行う施設とされている。また、自閉症児者に対する療育による支援を行っているところもある。なお、障害支援区分によって、障害の多様な特性その他の心身の状態に応じて必要とされる標準的な支援の度合いを総合的に示すようになった。

他者とのコミュニケーションの困難さやこだわりが、自閉症児者の社会適応を妨げている。そのため、自閉症児者が充実した余暇の時間を過ごすことができるように配慮して、その生活の質を高めていく必要がある。施設での生活の中で余暇の時間として毎日設定されているのは、所謂お茶の時間である。このため、お茶の時間を充実させることが求められる。

障害者支援施設では、お茶の時間を日々の生活における水分補給のために設定してあるが、加えて、利用者が和やかに過ごしたりコミュニケーションをとったりしやすいように配慮をすると、情緒が安定し、対人交流も促進される。生活支援員は、自閉症児者のお茶の時間に対して、「好みの尊重への配慮」、「心身の安定への配慮」、「周囲との交流への配慮」、「周囲の環境への配慮」の視点から、この順に関心を向けて支援をしている。自閉症児者がお茶の時間を有意義に過ごすことによって、その生活の質が高まっていくような働きかけをする必要がある（松山 2016）⁴⁾。したがって、その障害特性や行動特徴を踏まえて、日々のお茶の時間が有意義なものになるような支援が求められる。

1980年代以降、アメリカのソーシャルワーク実践理論において、援助対象の病理や欠陥に視点を置くのではなく、興味関心、生得的才能、獲得した能力やスキル等のストレングスを見出し、それに焦点を当てながら援助するストレングス視点（strengths perspective）が重視されるようになった。その視点からのソーシャルワークは効果的であり、ケース・マネジメント、教育、コミュニティ開発等、様々な対象に適用されている。このアプローチによって、ソーシャルワーカーはクライアントやクライアントにまつわる資源のなかに、「強さ」や「能力」、「よさ」を発見し、新たな「像」、視点を獲得するという強みをもつことになる（中村 2015）⁵⁾。

ストレングス視点では、援助者がクライアントの上手さ、豊かさ、強さ、たくましさ、資源などのストレングスに焦点を当てることを強調する。従来のソーシャルワークの実践は利用者の「弱さ」に焦点を当てていたことへの批判から、人や家族、グループ、コミュニティが潜在的にもつ力や能力に視点を置いたソーシャルワーク援助である。この視点は、リッチモンドの時代からソーシャルワークの根底にある。理論ではなく思考の方法であり、実践上の一つのレンズとされている（Saleebey 2002）⁶⁾。また、ストレングスの視点は問題対応型アプローチと異なる一つのレンズとされ、エコロジカルなシステム論とともにジェネラリスト・ソーシャルワークを形成する主要な枠組みとされている（Poulin 2000）⁷⁾。このため、クライアントの本来有する潜在的な能力や強さ等に焦点をあて、協働的な関係の中で問題を解決していく視点と捉えられる。

入所タイプの福祉施設におけるお茶の時間（ティータイム）は、日常生活の中で寛ぐことができる大切な一時であり、利用者に対してストレングス視点からの支援に取り組みやすい状況にある。利用者が安心して過ごすことができるような接し方や配慮が求められる。この積み重ねが、自閉症児者のQOLに影響

を及ぼし、より充実した過ごし方に繋がるものと推測される。そのため、生活支援員のストレングス視点
が、自閉症児者のお茶の時間における支援に対して、どのような影響を及ぼしているのかを明らかにして
おくことが求められる。

以上より、本研究の目的は、生活支援員のストレングス視点で、障害者支援施設における自閉症児者
のお茶の時間に対する支援に及ぼす影響について検討することとする。

Ⅱ. 方 法

1. 調査対象と調査項目

本研究では、障害者支援施設の生活支援員を対象として、自閉症児者におけるお茶の時間への支援に対
して意識する度合いを問う、独自の質問を記載した質問紙票による調査を実施した。

調査対象は、全国自閉症者施設協議会に加盟している入所タイプの障害者支援施設（旧体系における知
的障害者更生施設）において、青年期・成人期の自閉症者の生活支援を行っている生活支援員とした。無
記名で独自に作成した質問紙調査票を郵送により配布・回収した。合計463名の回答のうち、自閉症に関
わった年数が1年以上あり、主に関わっている対象者が知的障害のある青年期と成人期の自閉症で、全質
問項目に回答している424名の質問紙調査票を有効回答とした（有効回答率91.6%）。同時に分析対象とし
た。

調査項目については、回答者のプロフィールに関する性別、年齢、職種、自閉症に関わった年数、支援
している対象者のライフステージと障害種類、所属する施設の種類の種類を付記した。

分析対象者のプロフィールは次の通りであった。

性別は男性220名（51.9%）、女性204名（48.1%）、年齢は20歳から78歳で、平均年齢36.7歳（SD 10.4）
であった。自閉症に関わった年数は1年から35年で、平均7.5年（SD 6.3）であった。

2. 調査期間と調査方法

調査期間は、平成27年11月15日より平成28年1月15日までの約2か月間とした。

調査方法は、全国自閉症者施設協議会に加盟している入所タイプの障害者支援施設66か所に、独自に作
成した質問紙調査票を郵送にて配布し回収する方法にて実施した。35か所（送付した施設の53.0%）から
回答が得られた。なお、倫理的配慮として、質問紙調査票を郵送した施設に対して、調査の主旨、および
データの分析に際してはすべて数値化するため施設名は一切出ない旨を文書で説明し、回答をもって承諾
が得られたこととした。

3. 調査項目の作成手順

質問紙調査票の作成にあたっては、障害者支援施設の生活支援員10名に対して、配布した質問紙票に書
いてある「普段、自閉症児者におけるお茶の時間への支援をする際、気になっていることを思いつく範囲
で箇条書きにより、記入してください。」との文章を読み、その後、同質問紙票の欄に記入してもらった。
得られた回答のうち複数回答のあった内容をすべて使用して、22項目の質問項目を作成した⁶⁾。

自閉症児者におけるお茶の時間への支援に対して意識する度合いを問う独自の22項目の質問項目にお
ける回答は、「まったく気にしていない」（1点）、「あまり気にしていない」（2点）、「どちらとも言えない」
（3点）、「ある程度気にしている」（4点）、「かなり気にしている」（5点）までの5段階評価とした。各
質問項目について、等間隔に並べた1～5までの数字のうち、あてはまる数字に○を付けるようにした。

なお、自閉症児者の生活を支援する際、「長所を伸ばすこと」に対して意識する度合いを問う独自の質問項目についても、同様の手続きで回答するように求めた。

4. 分析方法

以上の質問項目への回答に対する分析方法として、まず、自閉症児者の生活を支援する際、「長所を伸ばすこと」に対して意識する度合いを問う独自の質問項目において、「かなり気にしている」と回答した179名をストレングス視点群、それ以外に回答した245名を非ストレングス視点群とした。各群の各質問項目の平均値と標準偏差を算出し、各質問項目についてストレングス視点群と非ストレングス視点群との間でt検定を行った。

Ⅲ. 結 果

自閉症児者におけるお茶の時間への支援に対して意識する度合いを問う独自の22項目の質問項目に関して、ストレングス視点群と非ストレングス視点群の各質問項目の平均値・標準偏差と両群間のt検定の結果については表1の通りであった。

有意差がないのは「6. 職員と交流すること」、「15. 窓からの景色を楽しめるようにすること」、「17. 会話等によりコミュニケーションをとること」の3項目（13.6%）、有意傾向は「13. BGM等を流してくつろぐこと」の1項目（4.5%）であった。

有意差が認められたのは、「1. 好む飲物を用意すること」、「2. 楽しく過ごせるようにすること」、「3. 利用者が話しやすくすること」、「4. 利用者同士で交流すること」、「5. 和やかに過ごすこと」、「7. ゆっくりと過ごせるようにすること」、「8. お茶を楽しむ雰囲気を楽しむこと」、「9. 気分転換を図ること」、「10. 飲物を選択できるようにすること」、「11. 身体を休めるようにすること」、「12. 十分な水分補給をすること」、「14. テレビ・DVDも楽しむこと」、「16. のんびりとした時間を過ごすこと」、「18. 静かに過ごすこと」、「19. 好むお菓子をを用意すること」、「20. 喉の乾きを癒すこと」、「21. 疲れがとれるようにすること」、「22. 利用者の過ごし方を尊重すること」の18項目（81.8%）であった。すべての項目において、ストレングス視点群の方が非ストレングス視点群よりも平均値が高かった。

表1. 自閉症児者におけるお茶の時間への支援に対して意識する度合いについての平均値と標準偏差

質問項目	ストレングス視点群		非ストレングス視点群		t 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
1. 好む飲物を用意すること	4.151	.883	3.824	.909	3.696***
2. 楽しく過ごせるようにすること	4.413	.732	3.906	.851	6.423***
3. 利用者が話しやすくすること	3.631	1.136	3.343	.948	2.766**
4. 利用者同士で交流すること	3.028	1.068	2.820	.954	2.103*
5. 和やかに過ごすこと	4.486	.730	4.118	.778	4.935***
6. 職員と交流すること	3.514	1.119	3.433	.883	.806
7. ゆっくりと過ごせるようにすること	4.425	.741	4.016	.815	5.293***
8. お茶を楽しむ雰囲気を楽しむこと	3.816	.991	3.314	.960	5.239***
9. 気分転換を図ること	4.324	.790	3.833	.878	5.933***
10. 飲物を選択できるようにすること	4.061	.999	3.682	1.050	3.768***
11. 身体を休めるようにすること	3.732	1.020	3.392	.950	3.528***
12. 十分な水分補給をすること	4.078	.963	3.767	.949	3.312**

13. BGM等を通してくつろぐこと	2.838	1.107	2.629	1.070	1.962 [†]
14. テレビ・DVDも楽しむこと	3.101	1.087	2.796	1.116	2.807**
15. 窓からの景色を楽しめるようにすること	2.715	1.061	2.531	1.018	1.810
16. のんびりとした時間を過ごすこと	4.095	.798	3.739	.885	4.263***
17. 会話等によりコミュニケーションをとること	3.397	1.238	3.335	1.033	1.430
18. 静かに過ごすこと	3.598	1.014	3.367	1.006	2.322*
19. 好むお菓子を用意すること	3.760	1.040	3.273	1.014	4.825***
20. 喉の乾きを癒すこと	3.911	.950	3.571	.864	3.829***
21. 疲れがとれるようにすること	3.704	.970	3.27	.900	4.796***
22. 利用者の過ごし方を尊重すること	4.391	.744	3.980	.832	5.256***

n=424 (ストレンクス視点群179名・非ストレンクス視点群245名)

[†].05<p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

Ⅳ. 考 察

障害者支援施設の生活支援員は、自閉症児者とのコミュニケーションが成立しないため、内面の心理的特性を捉えることに困難があると認識している(松山 2008)⁸⁾。また、自閉症児者の独特な行動特徴等を踏まえ、コミュニケーションが成立するように配慮をしながら、障害を軽減するように図っている。コミュニケーションをとりながら生活状況を捉えたうえで、生活を支援することが求められる(松山 2012)⁹⁾。そのため、生活支援員は、ストレンクス視点の有無に関係なく、お茶の時間に利用者が職員と交流をし、会話等によりコミュニケーションをとったり、窓からの景色を楽しめるようにしたりするような配慮をしているものと考えられる。

自閉症の社会的障害は、通常の一般的な学習の源泉や、他の人びとから得ることができる情緒面のサポートから遮断されるため、他の問題に比べるとはるかに深刻である(Wing 1997)¹⁰⁾。それ故、自閉症者の障害を軽減し、発達を促進させるには、他者との人間関係の交流を通して行動を展開させることが不可欠である(松山 2009)¹¹⁾。生活支援員が有するストレンクス視点からの支援には、お茶の時間において、利用者が好む飲物やお菓子を用意する、ゆっくりと楽しく過ごせるようにする、お茶を楽しむ雰囲気を楽しむ、テレビ・DVDも楽しんで気分転換を図る、利用者の過ごし方を尊重する、のんびりと静かに過ごす、水分補給したり疲れがとれるようにしたりして体調を整える、および利用者同士での交流を図る等、自閉症児者が充実した時間を過ごすための様々な支援をすることに繋がるものと推察される。

自閉症児者は、相手の表情、意図を示す身振りや姿勢を理解するのが難しい(Jordan, Powell 1995)¹²⁾。自閉症の場合、その障害特性から支援困難との見方がなされがちである。しかしながら、「支援困難」という事象が絶対的・客観的に存在するというよりも、利用者や家族とのやり取りの中で「支援が難しい」と感じた援助職が、本人や家族や他の関係者との間で、「支援が難しい、打つ手がない」と確認しあうようなやり取りを繰り返すことによって、「支援困難」という状況が現実のものとして実感されていくとの指摘がある(長沼 2016)¹³⁾。支援者がこのような見方に陥らないようにするためには、お茶の時間に限らず、他の生活場面でも同様に、ストレンクス視点から様々な支援をするように心がけることが求められる。

自閉症児者の課題としては、人と交流する能力、コミュニケーション能力、および社会性を高めていくことがあげられる。また、その障害を軽減し、発達を促進させるためには、他者との人間関係の交流を通して行動を展開させていくことを重視する必要がある(松山 2009)¹⁴⁾。自閉症者に対して受容的交流療法

のように、他者との人間関係の交流を通して行動を展開させていく方法をとる場合には、ストレングスに視点を置いた支援が成り立つ（松山・中島 2014）¹⁵⁾。それ故、自閉症児者の社会性を高め、その生活全般において生活の質の向上を目指すためには、人間関係の交流の中で、ストレングス視点から支援をしていく必要があると考えられる。

V. 結 論

生活支援員のストレングス視点が、障害者支援施設における自閉症児者への支援に及ぼす影響について検討した結果、①生活支援員は、ストレングス視点の有無に関係なく、お茶の時間に自閉症児者が職員と交流をし、コミュニケーションをとったり、窓からの景色を楽しめるようにしたりするような配慮をしている。②ストレングス視点は、お茶の時間において自閉症児者が充実した時間を過ごすための様々な支援をすることに繋がる。③生活場面において、自閉症児者に対してストレングス視点から様々な支援をするように心がけることが求められる。④自閉症児者の社会性を高め、その生活全般において生活の質の向上を目指すためには、人間関係の交流の中で、ストレングス視点から支援をしていく必要がある。以上が考察された。

引用文献

- 1) APA Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 5th edition 2013
- 2) Wing, L. The autistic spectrum. Constable and Company Limited. 1996
- 3) 小林隆児 自閉症の発達精神病理と治療 岩崎学術出版 1999
- 4) 松山郁夫 自閉症児者のお茶の時間を支援する生活支援員の認識 佐賀大学教育学部研究論文集 1(1) 133-141 2016
- 5) 中村和彦 さまざまな実践モデルとアプローチ I (第6章) 社会福祉士養成講座編集委員会編 新・社会福祉士養成講座 相談援助の理論と方法II 2015
- 6) Dennis, Saleebey. Strengths Perspective in Social Work Practice Allyn and Bacon. 2002
- 7) John, Poulin. Collaborative Social Work Strength based Generalist Practice F E Peacock Pub 2000
- 8) 松山郁夫 自閉症者の状態に対する知的障害者更生施設の生活支援員の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集 12(2) 281-287 2008
- 9) 松山郁夫 自閉症者の生活状況に対する生活支援員の捉え方 佐賀大学文化教育学部研究論文集17(1) 111-118 2012
- 10) Wing, L. (Ellis, K. 編) 自閉症 (久保絃章・井上哲雄監訳) ルーガル社 1997
- 11) 松山郁夫 青年期・成人期の自閉症者が示す感情に対する生活支援員の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集 14(1) 309-316 2009
- 12) Rita, Jordan. Stuart. Powell. Understanding and Teaching Children with Autism. John Wiley & Sons 1995
- 13) 長沼葉月 援助関係の形成が困難なケースに対する相談援助面接技法の研修プログラムの開発 人文学報 社会福祉学 32 1-22 2016
- 14) 松山郁夫 青年期・成人期の自閉症者が示す感情に対する生活支援員の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集 14(1) 309-316 2009
- 15) 松山郁夫・中島範子 自由遊びにおける自閉症児のストレングス 佐賀大学教育実践研究 31 149-156 2014

謝 辞

調査に際し、自閉症児者の生活支援を行っている障害者支援施設の施設長と生活支援員の皆様にご協力いただきました。感謝申し上げます。